**初めて小論文を書く前に**

初めて小論文を書く人にとって、文章によって論じることや、論の構成を組み立てることなどは、難しいように思われるかもしれません。しかし、方法を学び、練習を重ねれば、書く力は身に付きます。いきなりペンをとってやみくもに書き始める前に、小論文を書くためのごく基本的な事項を押さえておきましょう。3つの項目に分けて解説します。

体裁のルール

設問の確認と立論

文章の構成

小論文の試験では、設問の中で指定されるルールと、受験者がすでに知っていることを期待して設問には書かない暗黙のルールとを守らなければなりません。原稿用紙の使い方などは、別紙のリストにまとまっています。覚えることは多いですが、何度も小論文を書くうちに覚えられることでしょう。初めはリストを見ながら書く練習をして、徐々にリストを見ずに書けるよう練習していきましょう。細かいルールを軽んじてはいけません。ルールは読みやすさのためにあり、これを守ることは、論を伝えるという最も重要な目的を妨げるものがないよう努めるということです。

小論文の試験には、いくつかの出題方法があります。「何々について論じなさい」というテーマの指示だけのもの、「何々について賛成か反対かを示し、その理由について述べなさい」「何々をどうするべきか論じなさい」というような論じ方を限定するもの、ある程度の長さの文章を読ませたうえで論じさせるものなどがあります。当然のことですが、設問があなたに何を求めているのかをまず確認しましょう。これを怠ると、キーワードだけを拾った的外れな文章を書いてしまうことになります。たとえば、「何々をどうするべきか論じなさい」と求められているところ、「何々にはこのような問題があり、その原因は何々にある」とだけ述べて「どうするべきか」を論じない文章を書いてしまっては、原稿用紙の使い方が完璧で言葉遣いが立派でも、点をつけることはできません。設問をよく確認し、設問に沿って論を立ててから、構成を考える段階に移りましょう。

論の運び方、文章の構成方法は、さまざまあります。小論文試験では、ごく少ない文字数で論じなければなりませんから、シンプルなやり方をするのがよいでしょう。まず段落の数を決めてしまいます。1段落を約200字として、600字の指定なら3段落、800字なら4段落、とすると悩みにくいでしょう。色々書きたいことが浮かんでくるかもしれませんが、この段落数に収まるように取捨選択します。

文章全体が「序論」「本論」「結論」の構成になるよう、最初の段落を序論、最後の段落を結論、その間に入る段落を本論とします。文章全体の構成のほかに、段落内の構成についても考えましょう。日本語の「段落」という概念はまだ新しいもので、厳格な決まりのないものですが、ここでは参考に、英文の「パラグラフ・ライティング」の手法について紹介します。「パラグラフ」を段落に置き替えて説明すると、「1つの段落では1つのアイディアについてのみ書く」「段落の最初か最後に、その段落の内容を1文で述べる『トピック・センテンス』を置く」などの原則があります。各段落のトピック・センテンスを繋げれば、文章全体の要約となります。まずはこのトピック・センテンスを段落数分作り、論の骨格を決めたあと、各トピック・センテンスを補強する裏付けを追加していけば、文章が出来上がります。このシンプルな手法を使えば、混乱しにくく書きやすいですし、読み手にとっても理解しやすい文章を書くことができます。

以上の基本事項を押さえたら、さっそく書いてみましょう。よりよい文章を書くために学ぶべきことはまだまだたくさんありますが、それはまたの機会に説明します。